

近世後期における山口俳壇の形成

原田由衣

一 以哉坊来山以前の山口俳壇

近世における、中国地方の俳壇史については、下垣内和人氏『近世中国俳壇史―研究と資料―』（和泉書院、平成三年六月）にその概要が示されている。

中国地方における蕉門諸家たちによる蕉風俳諧の伝播は芭蕉没年の元禄七年以後、盛んとなり、元文頃までに一応の終結をみる。それは蕉門諸家の高齢化・死亡等によるものである。享保十六年支考没、元文五年野坡没等、中国地方に関係深い蕉門俳人が没した後、彼等によって伝播された蕉風俳諧はそれぞれに消長をみながら中国地方に定着していく。（中略）

中国地方における蕉門野坡流は野坡自身の手によって開拓されたものが、門下の人々によって定着した。それに対し、野坡より早く中国地方に來遊して多くの門人を持った支考は來なく、なつてからの空白が大きく、その地盤のほとんどを失った。その後、支考門の人々によって再び中国地方の開拓が行われた。それは、支考門の蘆元坊里紅が支考に勧められて享保十五・十六年に來遊した『藤の首途』の旅に始まる。

近世後期、周防・長門に相次いで訪れたのは、美濃派と呼ばれる支考門の俳人たちであった。この美濃派宗匠の來遊により、周防・長門に美濃派が伝播・定着していった。美濃派定着の様子は、俳書への入集によって知ることができる。以下に、美濃派の中国地方開拓が再開された『藤の首途』以降の美濃派俳書四作品について、周防・長門作者^{注1}の入集数を「表一」としてまとめつつ、特に、山口在住作者^{注2}の入集数は別立てで示した。行脚記念集に地方作者の入集が見られれば、その地域に美濃派宗匠が訪れたことがわかる。その際、入集数が多いほど俳壇の規模も大きいと考える。

「表一」に明らかかなように、周防・長門作者の入集数は、安永三年『鳳巾の晴』から急激に増えている。以哉坊『鳳巾の晴』の旅が周防・長門の美濃派定着の大きな契機になったことについては、下垣内氏も次のように指摘している。

〔表一〕美濃派俳書への入集数

作品名	刊年	編者	周防・長門作者 入集数	山口作者入集数
『藤の首途』	享保十六年	盧元坊里紅	周防一名 長門十五名	なし
『花供養』	寛保三年	盧元坊里紅	周防四十一名 長門三十三名	なし
『鳳巾の晴』	安永三年行脚 (刊年未詳)	安田以哉坊	周防三百四十九名 長門九十一名	二十六名 (故人・吉田連中を 含む)
『桜のゆるし』	天明二年行脚 (刊年未詳)	百茶坊響古	周防百六十三名 長門二百五十七名	六名

享保十五年の『藤の首途』では周防一名(如風)・長門十五名(扨朝・昇式ほか)であったものが、寛保三年の『花供養』では周防四十二名・長門三十三名となっている。これは周防で岩国・今津・柳井浦・山代・三田尻と範囲が広がり、長門で赤間関の昇式らのほかに萩・通・仙崎と各地の人々が加わったためである。さらに、『花供養』では石見の浜田・野井・太田・津和野の各地の人々が新たに加わっている。これらの各地に地盤が広がったのは盧元坊の力だけでなく、沾耳坊の『梅日記』の旅が大きく作用している。これらの周防・長門・石見の各地方は『梅日記』の旅で沾耳坊が回った地方であり、交遊した顔ぶれも大たい似通っている。

その後、信杖坊が『杖のはじめ』の旅で周防(笑云ら)・長門(昇式ら)の人々と交遊している。しかし、これらの周防・長門・石見の美濃派の地盤を大成したのは安永三年の以哉坊の『鳳巾の晴』の旅である。さらにそのあとを天明二年、百茶坊が『桜

のゆるし』の旅で、より強固な地盤とした。

『藤の首途』^(注三)は、盧元坊が支考の命を受けて享保十五年春から翌年九月までの中国・四国・九州を行脚した際の俳諧紀行である^(注四)。周防では徳山の如風子を訪ねたのみで、その他の地域で句を読むことはなかった。それは、『藤の首途』の旅が筑紫行脚を目的としており、山口は通過点に過ぎなかったことに加え、この段階ではまだ山口に見るべきものはなく、俳壇と呼べるものは形成されていなかったためであるといえよう。『花供養』^(注五)は、盧元坊が編集した芭蕉五十回忌の俳諧追善集である。今回調査の対象としている山口地域は、『花供養』の段階までは入集はなく、『鳳巾の晴』から入集が始まっている。確かに、美濃派俳書の入集数から考えると、山口俳壇は安永期の美濃派宗匠の行脚から始まったように見えるが、表に挙げた俳書は中央の俳人によって刊行されたものであり、俳書に載った地名や入集数は美濃派の勢力を知るひとつの目安に過ぎない。山口俳壇という、限定された地域の形成の様相をより具体的に知るには、地域の資料を調べる必要がある。

さて、山口俳壇の様相を示す資料として、山口県文書館安部家文書がある。江戸時代、山口市の道場門前に商家として栄えた安部家の資料であり、商いや家に関する文書の他にも連歌や俳諧など文芸に関する資料も多い。安部家文書中の俳書としては、安部素文らの刷物や、その交遊関係から届けられた刷物・書簡が残っている。山口俳壇の刷物は、山口鴻嶺(高嶺)になぞらえて、「鴻嶺下(高嶺下)」と題されている。現存しているのは明和六年から寛政二年までの十五冊で、安永七・八年分を除き、同型の横本に統一されている。安

部家文書中の刷物については、下垣内氏「中国地方における美濃派の定着」(注六)にも言及があるが、本稿では、特に山口俳壇に焦点を絞って詳しく取りあげることとしたい。以下、まずは「鴻嶺下(高嶺下)」の概要について述べておく。

表紙は安永期まで「鴻嶺下」、天明期からは「高嶺下」となっており、安永五年のみ「周防」という標題である。内容は、歳旦句を中心として納会・歳暮句や春興句を含む、いわゆる春帖である。安永四年には「鳳巾の晴」で山口を訪れた以哉坊の句も載せられており、山口俳壇と美濃派宗匠の交流も見取れよう。安永五年の「周防」を含む春帖十六冊を、年記・標題・書型・刊記・内容・巻頭・巻軸の項目ごとに「表二」「山口連中春帖目録」としてまとめた。また、各春帖の入集者を、資料ごとに「表三」「山口連中春帖入集者」としてまとめた。山口連中以外は、連中名と名前を括弧内に収めた。なお、「表二」・「表三」のNoは対応しており、同一Noは同一資料を示す。整理番号は、山口県文書館の目録番号によった。

刊記には、表記にばらつきがあるものの、明和六年の段階から全て同じ花洛寺町の橋屋治兵衛の名が示されている。橋屋治兵衛は盧元坊里紅編の『桃の首途』や『藤の首途』等の美濃派俳書を刷っている版元であり、百茶坊編の『藤の首途』巻末にも「橋屋治兵衛寿梓」とある。橋屋治兵衛と美濃派の関係については、鹿島美千代氏「美濃派俳書の版元について——橋屋治兵衛の江戸出店野田太兵衛と江戸の広井秀峨」(『図書館情報メディア研究』第七卷一号、平成二十一年十月)に、以下のようにまとめられている。

道統二世支考より美濃派は京都の俳書専門書肆橋屋治兵衛と提携し、以降江戸時代を通じて膨大な数の俳書を出版する。俳諧

流派同士の派閥意識は強く、それゆえ各派に専属の書肆が付いて出版を担当していた。その中で美濃派の俳書出版数は群を抜いて多く、それが美濃派という流派のひとつの特徴でもあった。そして美濃派の出版する俳書はどれも同じような体裁であることも一つの特徴である。書型は半紙本、しかも一冊本が圧倒的に多い。表紙は黄土色や薄浅葱のような大変地味な色で無文様か布目文様、内題(時には扉題)には篆刻文字や飾り文字を用い、丁数は多くの俳書で一〇〇三〇丁未満の小冊が多い。絵入りであっても半丁程度に止まり、色刷なども施されない。しかしこの至って質素で画一的な作成方針によって美濃派は俳書作成費を控え、大量に作成・出版することができたのである。翻つてこの本作成の基本姿勢が、美濃派及び美濃派と提携した橋屋治兵衛の俳書作成の基礎となっていた。

『鴻嶺下』は横本及び一枚刷りと書型は異なるものの、地味な仕様と篆刻文字・飾り文字で刷られた標題は美濃派俳書の特徴を有していると言える。さらに、「表三」によると、明和期に名を載せている連中の顔ぶれは、安永期の春帖や『鳳巾の晴』に参加したメンバーとさほど大きく変わっていない。つまり、安永三年『鳳巾の晴』の旅以前、さらに限定するならば、現存する『鴻嶺下』の上限である明和六年の時点で、山口俳壇はすでに成立していたと推測されるのである。しかも、中央の俳書と同じ美濃派の提携書肆によって春帖を出版していた美濃派俳壇であった。美濃派俳諧の統制方法の特徴(後述)から、本論においては、特に地元の指導者を有し、俳諧活動を行った時点を、俳壇の形成時期と認めることとしたい。

明和六年の『鴻嶺下』は、形式が既に定まっており、吉田連中

との交流も見られることから、それ以前に刊行されたものがあってもおかしくはない。美濃派の伝播が、『花供養』以降、明和六年以前とすると、延享・明和初期となる。『花供養』より前ではあるが、『鳳中の晴』以前に來山した人物として、越中国泊の沾耳坊がいる。元文三年、沾耳坊は西海を旅しその紀行を『梅日記』^{〔註八〕}として延享二年に刊行しているが、沾耳坊は美濃派ではなく、山口に定着しなかった淡々系の人であるため、この來山が俳壇形成のきっかけになったとは考えにくい。ただ、『梅日記』には、山口の人が詠んだ句も載せられており、中には『鳳中の晴』で故人として名録に名を載せている舟甫もいる。この頃には相次ぐ中央俳人の行脚により、俳諧を嗜む人が山口にも増加していたのは間違いないだろう。また、東京大学総合図書館酒竹文庫に蔵されている『俳諧書籍目録』^{〔註九〕}中の橋屋治兵衛の出版目録には、明和四年に山口連中の壺外が『蟬のわかれ』を刊行していることが記されている。俳壇の成立に関して、明確な年代を特定することはできないが、明和期よりさほどさかのぼる時期とも考えにくい。明和期を山口俳壇の確立期とみて、大きくは誤らないだろう。『俳諧書籍目録』によると、宝曆・明和年間以前に周防の編者によって刊行された俳書はきわめて少ない^{〔註一〇〕}。山口は、周防における美濃派俳壇としては、確立時期も早く、精力的に活動を行った存在だったのではなからうか。

二 安永―天明期の山口俳壇

前章において、明和期からすでに山口には美濃派俳壇が存在していたことを述べたが、安永期に入ると、遠方まで勢力を広めるとい

う明確な意図を持った美濃派宗匠の行脚により、さらに美濃派が定着することとなる。安永三年、以哉坊『鳳中の晴』^{〔註二〕}の旅によって、山口俳壇と美濃派宗匠の直接的な交流がなされた。美濃派五世（以哉派）の安田以哉坊は、四世五竹坊の命を受け、九州まで勢力を伸ばすという明確な意図のもと、西国行脚の旅に出る。その紀行が『鳳中の晴』である。『鳳中の晴』における防長踏査は、五月に岩国に入るところから始まり、以哉坊は各地を回ってそれぞれの土地の人々と連句を巻いている。下垣内氏「中国地方における美濃派の定着」は、次のように説明している。

周防は岩国から始まる。（中略）以下、同所武門連、同所市中連・由宇・柳井・小松・徳山・同所西連・下松・同所・富田（名録に戸田連を含む）・宮市・徳地・山口・同所・矢田と回った各地で連句（短歌行・短歌行一折・六句表・付合など）を興行し、その土地の人々の名録（連句のメンバーも含む）を付している。（中略）長門の旅を終えて、以哉坊は再び周防山口に寄り月を見る。

山口連中にとって以哉坊の『鳳中の晴』の旅は、もともと繋がりのあった美濃派宗匠と実際に連句を巻くことのできた貴重な機会であり、美濃派俳諧が定着する大きな契機となったのである。

安部家文書刷物のうち、No.10「安永七年春帖」・No.11「安永八年春帖」には、「美濃文通」として、巻軸に以哉坊の句が載せられている。「美濃文通」がある二つの春帖は、他の年と表題・書式が異なり、ともに表題は「周防山口高嶺下」、書式はNo.10が一枚刷縦紙、No.11が一枚刷折紙である。行脚の後も春帖に文通句が見えるという現象は、美濃派道統と地方俳壇との継続的交流を証するものであろう。山口

連中してみると、自分たちの春帖に美濃派宗匠の文通句が載ることとはステータスのようなものであったし、美濃派宗匠にしてみれば、その俳壇が美濃派であることを示す一種の広告のような役割もあつたのではないだろうか。また、安部家には安永期の美濃の歳旦帳^{注三〇}も伝わっており、美濃派宗匠との交流が、一過性・一方的でなく、相互に継続して行われていたことが知られる。

山口連中が美濃派宗匠と交流を継続して活動する中、以哉坊の次に来山したのは、美濃派の百茶坊轡古であつた。以下、下垣内氏「中国地方における美濃派の定着」の引用による『桜のゆるし』(注二二)の概要である。

天明二年、美濃の百茶坊轡古が中国九州への旅に出た。その紀行が『桜のゆるし』五冊(架蔵)である。百茶坊は以哉系である。(中略)天明二年三月、以哉坊の『鳳中の晴』の跡を慕つて旅に出、人々に送られて、京都に入り、大坂から船に乗つて周防に向かう。(中略)こうして、岩国から通津・小松・由宇・田布施・高森・徳山・徳地・戸田・富海・海北・矢田・山口と歩く。名録は百六十三名(高森の名録は後の便にともらず。)にのぼる。『鳳中の晴』のゆかり人々、矢田の里正、山口の壺外・素文や、徳山の暁左園雪洞がいる。岩国に着いたのは四月なかばで、山口は六月末であつた。

天明期の山口の春帖のうち安部家文書に伝わっているのは、天明八年・九年の「高嶺下」のみである。書式は安永期と変わらず、表題を「高嶺下」とする。「表三」により、連中の顔ぶれを安永期と比較すると、壺外・素文・貫里・桃巴・梨更以外の連中が大きく入れ替り、人数も安永期には十五人程度であつたのが、天明九年には

二十四人と増えている。文通句は、美濃派宗匠ではなく、南明山・宮市・華和里・須川・朝倉郷と、周防・長門の地域から届いたものであり、安永期には毎年句を載せていた吉田連中に代わつて秋穂連中が句を載せている。

安永・天明期は、美濃派宗匠の精力的な行脚により、山口のみならず、周防・長門に美濃派俳壇が育つていった。その中で、山口俳壇は美濃派宗匠や周辺地域同士の交流を通して発展し、人数も増加した。安永・天明期は俳壇が確立した明和期に続く、発展期であつたと言えよう。

三 山口俳壇の中心となつた人々

明和期に確立し、安永・天明期に発展した山口俳壇は、どのような人々によつて担われていたのだろうか。

『鳳中の晴』・『桜のゆるし』の旅において、山口で巻かれた連句の発句と前書きは、すべて「壺外」という人物が書いている。小川國治編『街道の日本史⁴³ 長州と萩街道』(吉川弘文館、平成十三年十二月)には、「壺外」は道場門前の薬種商であると書かれている。No.12「安永九年春帖」の壺外発句前書きに、「きのふも若しけふも又若しき氣質のおろかに暮せしも、はやことし此春既に半百の齢に腰をかられて」あることから、壺外は享保十六年生まれとわかる。また、河野通毅編『大内村史』(マツノ書店、昭和六十三年二月)には、宮竹壺仙という人物が是什坊傘狂について美濃派俳諧に精進し、菊舎と吟友であつたと書かれているが、後に述べるように、傘狂主催の取越法会に菊舎とともに参列したのは「壺外」であり、「壺

「仙」とは「壺外」の誤りであると考えられる。『大内村史』によると、壺外の本名は宮竹三郎衛門であり、川崎源太郎編『山口県下豪商早見便覧』（明治十九年六月刊）に「山口道場門前町六十六番地 内務省免許薬舗 宮竹善之介」の図があることから、宮竹家は大きな薬屋であったことがわかる。壺外と美濃派宗匠との関係は、『鳳巾の晴』にも見られる^{注一四}。

以哉師、かつて筑紫経回の折から、予が草庵へも来杖あるべしとは、かねてその聞えありながら、けふやあすやと待佳しも、およそ九十日ばかりならん。①まれなとし頃の文通とても速やかに届き待るにぞ、返書／＼の教示も、いと親切なる筆を添え給ふ事も、ひとへに志願の至れるかとそぞろうれしくて、②か、るあやしき屋どりへも駕を迎へてもてなす事、誠に此日此時の本懐なるべし。

壺外（中略）

訪ひとはれする風雅の因縁は去年とことしに隔なくて、水無月ひと日、③山口より壺外子伴ひ、かの二竹園に遊びにけりとは、その因みのはじめならぬ心栄えより、老たるも若さも他事なきあるじまふけに、そのしたしみのなを浅からねば 以哉坊

傍線部①から、壺外は以哉坊の来山以前にも、文通による俳諧の添削指導などで教えを受けていたとわかる。傍線部②からは、壺外が以哉坊の行脚を心待ちにしており、自宅へ招いてもてなしたいという歓迎の意が読みとれる。傍線部③では、山口で連句を巻いた後、矢田の二竹園の連句にも参加するなど、壺外が美濃派宗匠との交流を積極的に行っていたことが知られる。

寛政二年には、壺外は、京都東山双林寺で行われた美濃派六世宗

匠朝暮園傘狂主催の芭蕉百年忌の取越法会に、長府の田上菊舎と共に参列している。菊舎が故郷長府を発つて京に赴く道中および法会当日と、その後の俳諧を記録した『首途』（注一五）に、その様子を見ることが出来る。

政も寛なることし弥生十日、洛陽におゐて（ ） 故翁の遠忌の大会を営まる、とかや。其雅筵を志し遙けき海路を越ゆるのうへ、猶はた長途の旅寝をも思ひたてる彩寝老人、雅情荘んに、俳力たゆまざる、誠にうらやむべきけふの轍ひを見送り侍りて

（中略）

此下津井に舟が、りして、ひと日二日と追い風を待うち、最早やよひの二日となれり。指を折ば、京都の法会も今しばらく日数せまりぬ。舟を行て間に合べきや、陸路をたたりて間にあふべきか、案じれば心ならず。もしや明日にも風なをりなばと、壺外老雅は舟に残られ、ひとり下津井より舟上り仕侍る。俄おもひたち故、互いに別離の句なし。爰より二里りばかり行。二さと三里門並軒に桃柳を葺、いと賑やかなるになぐさみて

壺外はこの年五十九歳という高齢でありながら、京都まで旅に出るほど熱心に俳諧活動を行っていた。下津井では天候回復を待つ間、菊舎と二人で句を詠み合っており、この後菊舎は陸路、壺外は海路で京都を目指す。法会の前、菊舎は師である傘狂の経廻に同行し、壺外も共に行動したのであった。

兼ての願ひ山／＼叶ひ、殊更宗師経廻に付したがはる、壺外老雅の信切を感じおくとて

つとめさぞな山吹の朝藤の暮 (菊舎) (中略)

近き再会を約して、菊舎風尼と東西へ別る、とて

頓て落合ん小鮎の別れ 壺外

法会が終了した三月十日、菊舎と壺外は京都で別れている。

山口俳壇においては、壺外は中央俳人とのつながりが最も強かった人物であると言える。一方、山口俳壇でのその立場は、『鴻嶺下』から読み取ることができる。

爰にとしく、千鍛窟の納会に遊ぶ事は、全くこの道の因み
浅からざるより、掛け乞共のかまびすしきを遁れんと、例
の一爐に召かれて

素文

宵の間もしばらくぞ扱除夜の鐘 (No.6 「安永三年春帖」歳暮)

四季の雅会のあるが中にも、とりわきとしの余波こそ無情
になづまぬ遊びならんと、例に彩蓼園の別荘に案内せられ
て庭の一本を詠めよなど、いとにほやかなる会釈にぞ、因
みはいよ／＼厚からんとなり

素文

それ咲てたのしめとあるか年の梅

(No.8 「安永五年春帖」未の納会)

折からの雪景色に、彩蓼園の別荘に年の余興を催せられて

素文

埋もれる物皆花やとしの雪 (No.9 「安永六年春帖」納会)

闇かしきとしの物際ながら、例の彩蓼園のとし忘れに一夜
とあるにまかせて

素文

にわ影やとしの遊びの有りとある

(No.11 「安永八年春帖」戌の納会)

傍線部の「千鍛窟」「彩蓼園」は壺外を指しており、山口連中の納

会・四季の雅会・年の余興・年忘れといった句会は、壺外の別荘が会場となっていたことが知られる。この壺外の別荘が、鴻嶺の麓にあったことから、山口連中の春帖に「鴻嶺下(高嶺下)」の標題が付けられたのではないかと推測される。「表二」によると、「鴻嶺下」における巻頭・巻軸は、No.7 「安永三年春帖」の巻軸、No.15 「天明九年春帖」の巻頭を除く、ほぼ全てを壺外が詠んでいる。

中央俳人と積極的に関わりを持っていたこと、句会が多く壺外の屋敷で行われていたこと、春帖の巻頭・巻軸のほぼ全てを詠んでいることから、山口俳壇において、壺外は宗匠的立場として中心に位置していたと言える。さらに、『俳諧書籍目録』によれば、壺外は、明和四年に『蟬のわかれ』を、安永三年には萩の里川とともに『頭陀名月』を刊行している。前章で明和期を山口俳壇の確立期と位置付けたが、やはり明和期には壺外も美濃派俳人としてすでに活動しており、山口俳壇を率いていたと言えよう。

さて、『鳳巾の晴』で、壺外・以哉に続いて句を載せているのが「素文」である。『鴻嶺下』では、聖節・納会の発句・前書きを多く書いている。『鳳巾の晴』経廻之部巻之五所収の以哉坊前書きには、次のようにある。

④安部何がし素文字の窟号を与へるに、取あえず其意窟なるべし。さぞ我家の俳諧には言葉を伝えずして其意を伝ふとの教えあるより、⑤よのつね老後の風雅を養んとらば苔のむすまで、なを此窟の万世不朽もむべならんかし。

傍線部④より、以哉坊が素文に「其意窟」の号を与えたことがわかる。そのため、安永三年の『鴻嶺下』までは「一步亭素文」の表記であったものが、安永四年からは「其意窟素文」となっている。また、

『鴻嶺下（高嶺下）』には明確に年齢を示す記述がないものの、傍線部⑤で以哉坊が素文にあてて「よのつね老後の風雅を養ふ」と述べているところから、壺外よりは若いものの、それほど若年でないと推測される。『街道の日本史⁴³ 長州と萩街道』によると、素文は安部四郎衛門（俊英）である。安永四年刊『鴻嶺下』所収の素文発句には、次のようにある。

ことしより予が其意窟に年忘れの催しを、と彩蓼園子のさしづより、年の際の物さながら屏風にあたり粉らかして

素文

掛乞に留守をつかふて遊ばふ歎

（No.7 「安永四年春帖」午の納会）

壺外の指示によって、素文宅でも句会を開くことになったことを示す内容である。壺外・素文は、他の連中の句会に参加する際も常に二人揃っている。また、No.15 「天明九年春帖」では、毎年巻頭に句を載せていた壺外に代わって素文が句を載せていることから、素文は壺外に次ぐ山口俳壇の中心的人物であったと言える。

山口俳壇において、宗匠的立場で俳壇の中心にいたのは壺外、それに次ぐのが安部家の素文であった。壺外については、周防徳山の如風子も薬種商を営んでいたことから（『鳳巾の晴』）、俳人と薬種商の職業的関係性や薬種商同士のネットワークが存在していたとも考えられる。安部家当主であった素文が俳壇の中心となったことは二つの理由が考えられる。一つは美濃派の統制方法によるものである。美濃派俳諧では、道統が直接地方をも治めるのではなく、その地の有力者を指導者として育て、地元の俳壇を任せていた。つまり、土地の有力者が誰であったかによって俳壇の構成員は大きく異

なるのである。そのため、防長両国においては、城下町である岩国や萩では武門連中が栄え、商家が連なる山口では、道場門前で薬種商を営んでいた宮竹家、大きな商家として栄えていた安部家が俳壇の中心となったのである。もう一つは、安部家の文芸に対する造詣の深さによるものである。安部家文書には、寛文から明治にかけての連歌資料が多く残っており^{注26}、寛文四年「豊かなる」に名が見られる安部宗也をはじめとして、江戸時代前期までの安部家当主は、連歌に熱心であった。特に、元禄年間に活躍した安部宗英が興行した連歌資料が最も多い。宗英は素文の二代前の当主で、安部家文書には宗英が興行した貞享・元禄・正徳・享保期の連歌懐紙が現存しており、連歌に特に積極的であったことが見てとれる。また、安部家文書には、宗英の死去に際し多くの知人から送られた追悼の書簡が残っており、その交遊の広さも推し量ることができるのである。しかし、連歌に関する資料が残っているのは宗英の時代までで、それ以降しばらく連歌資料は見られず、明治期の宗敬の時代に至って、連歌が再興されている。この連歌資料の空白期間となる明和から文化・文政期に存在するのが、『鴻嶺下（高嶺下）』等の美濃派俳諧の刷物や、俳諧発句を含む素文宛書簡である。このことから、安部家はもともと文芸に高い関心を寄せている家柄で、その対象が宗英の代までは連歌であり、俊英（素文）の代は俳諧であったということがわかる。その熱心な文芸活動に変わりはなくとも、時代の流行に合わせて対象も変化したということであろう。美濃派が地方の有力者を育てようと普及に励んでいたこと、山口という土地の有力者が、文芸に関心のある商家であったこと、この二つの要因が重なり合い、素文が壺外と共に山口俳壇を率いることとなったと

考えられるのである。

四 周辺で俳壇を担った人々

壺外・素文を中心とする山口俳壇の周辺には、俳壇を担う多くの人々がいた。『鳳巾の晴』『桜のゆるし』にもその名に見える貫里は、明和七年の『鴻嶺下』以降、毎年の春帖に名前が載っている。その際、「流月亭貫里」もしくは「流月館貫里」と表記され、No.14「天明八年春帖」では「在東武貫里」と表記がある。壺外・素文のように発句と前書きを書いていることも多く、山口俳壇において、比較的中心にいた人物であろう。No.11には、貫里の職業がわかる発句前書きがある。

養家の父、子に年来慈愛の心栄えといひ、去年より⑥武門に禄をゆづられ、共に目出たきとしを迎え、朝に嘉例の祝ひ事調え侍るとて
流月亭

居双ん曉し月の猶くれし

(No.11「安永八年春帖」聖節)

傍線部⑥の「武門」「禄」という言葉から、貫里が武家であったことがわかる。「在東武」との肩書は、貫里が参勤交代で江戸に出向くこともあったことを示している。

当然ながら在府中の雅遊も想像されるところであり、貫里は決して壺外・素文を通じてしか中央俳人と関係を持てなかったわけではない。また、寛政二年からは山口連中としてではなく、在東武連中として句を載せている。在東武連中には、No.15「天明九年春帖」に初めて名前が載った、右琴・里蝶・其疏がいる。安永・天明と俳壇が拡大し、在東武の人数も増えたことで、江戸に新たに山口連中を

形成したのではないだろうか。

また、安部家文書の中に『温泉元之遊』^{註一七}という資料がある。明和七年成立の稿本で、書型は半紙本、共紙表紙、墨付四丁。冒頭には壺外が次のように書いている。

折から更のうら、かさむなしく、内居に暮さんよりはと、
一歩・貫里の同士を誘ひ、温泉けさへと

連だ、ん長閑さにつきそらまで

壺外

壺外・素文・貫里は連れだつて温泉へ出向いた。句中の「ついそこらまで」という語句や、引用外の文中に「姫山」ともあることから、三人が遊んだ温泉は湯田温泉であろう。壺外と貫里にはかねてから個人的な付き合いがあり、その交流を核として山口俳壇が形成された可能性も考えられよう。

その他に明和から安永期の『鴻嶺下』に名が載っているのは、独笑・一葉・大車・如舟・左琴・琴露・梅之・蘭雨・可丁・其流・素明・左丈・如風・儲州・花放・梨(利)更・之流・桂兎・猶抄・一芳・藤巴・燕糸・市芳・藤巴・梨悠・巒台・其由・可朝・駟経である。天明期になると、其宥・緩固・瓠風・素遊・曉□・蟠路・蘭葩・無荷・度江・如霧・壺猷・冲羽・素風・右琴・東水・志逸・辦二・千里・里蝶・蟠路・花蜜が加わり、連中の顔ぶれは大きく変わっている。

まれにひとりの愛子をもふけて、月に日に起立の等閑なら

ざれば

流月亭

たのしさや膝のうへから笑ひ初

貫里

汲たてのこ、ろ清きや初手水

女左錦

つよからず弱からず、いさ、かおかしき物に働きある俳諧
(No.8「安永五年春帖」聖節)

に究竟の名を祝して
流月亭

たはら子や理屈なひ水のなふてよし

貫里

是からはこゝろも花の初げしき

女左錦

(No.10「安永七年春帖」納会)

『鴻嶺下(高嶺下)』にはほぼ毎年句を載せている左琴は女性で、右のように貫里と句を並べていることが多く、夫婦関係も推測されるが、明確な資料は残っていない。また、『大内村史』には、天明八年以降の春帖に名が載っている蘭葩に関して、以下のような記述がある。

蘭葩は父の代から山口道場門前の年寄役所勤で、初め常吉、後は兵衛又孝兵衛といった。また是伯ともいつたらしい。俳諧を好み点者をつとめたこともある。曇華坊という俳号もあった。その墓は山口の本国寺にある。若い時宮竹壺仙に師事し^(注一八)、その子の玄樹は問田の益田尹之進の家臣岡田慶庵の養子になった。紹巴自筆の天文廿年九月廿二日の三好長慶興行の連歌を多賀神社に奉納したのが蘭葩である。

その他、山口連中ではないものの、山口俳壇に深く関わっていた人物が、矢田^(注一九)の里正である。安部家文書所蔵の天明三年矢田の春帖^(注二〇)には、「歳旦賀初老」とあることから、里正は寛保四年生まれとわかる。『大内村史』によると、里正は、文政元年五月廿二日に辞世の「着て行は卯の花ころも西の旅」の句を残して、七十六歳で他界したという。

文化九年に「松の春」という小冊子ができていた。それは二竹園里正の古希祝賀の句集である。二竹園里正は前述の「世之花」にも出ている矢田の俳人宗匠であった。若年の頃から萩の古萩園とも交流が深かった。古萩園里川は古萩園初世で美濃の

田中五竹坊に学んだが、里正も安永三年春美濃に遊び五竹坊の門に学び、「なお学べ柳の鞭の弱くとも」の句をもらったので名譽のこととせられた。帰郷後は矢田地方の俳壇の中心人物であった。(中略) その子に白雀園里声、里三の二人あつて共に父の志をついで俳諧の道につくした。

『鴻嶺下』では「二竹園里正」と表記され、安永四年から安永八年に句を載せている。

安永五年春帖の里正前書きには、次のようにある。

ことし此暮、金沢の氏を督よと父の命おごそかにして、古來相伝の⑦田畠及尤鋤鋤の物の具まで、恙く其外慈愛にあまれる家統なるべし。さは年の調度さへ彼是と晴がましくおぼえられて

二竹園

譲られた世話の外にもとし用意

里正

(No.8「安永五年春帖」)

傍線部⑦に「田畠」「鋤鋤」とあることから、里正の家業は代々農業を営んでいたことがわかる。俳諧を嗜む余裕があったことから、豪農であったのだろう。さらに、『鳳巾の晴』にも、里正の名を見出すことができる。

旧里帰郷

師坊もとよりの多病いぶかしく、⑧長途の老情をいたはらんと、しらぬつづくしの海山と供し侍るが、けふや恙なく我周防の茅屋へ伴ひ帰りて

我が炬へも老をなをして落つきぬ

矢田里正

互別

飯初ながら百有余里の旅寐を同ふして、木の糸の蒲団に寐

はくれ餛子の夜着に起わすれつ、めぐり／＼て、⑨防の矢田なる二竹亭に帰り来る日は霜月もはじめの八日也けり。いぶせき山路の労をも悟り合ひ、おそろしき舟路もたはれ鳥のたはれ言にいひなくさみて、ひと日ふた日は長途の足を休め待るが、互に帰房の日程を急ぎて、わりなくも東西へ立別れ行にぞ

別れ路やちからにつかむ草もなし

有本面 魚坊

是まで百余日ならん旅のちからにもと、⑩魚子は朝夕紀行の筆をたすけ、里子は馬かり宿とりの働きに、我は何の世話なきぬきされての行脚坊となりつく。霜月八日頭ならん、周防山口なる矢田の二竹亭につ、がなくめぐりたる。ひと日二日の労れを養けて、けふや石防州別れとなるも余波をしけれど、逢ふ日あれば別る、日あるのならひ、と□にこゝろづよく、遠からぬ再会を約してあとは何いふ言の葉もなし

三ところへ別けてはならず六つの花

以哉坊

傍線部⑧から、里正は以哉坊の行脚に同行し、山口への出迎えに始まって、各地の連句に参加したことが知られる。傍線部⑨の通り、九州を巡って矢田に帰って来たのが「霜月もはじめの八日」であった。以哉坊・里正と旅を共にしたのは石見大田の魚坊で、傍線部⑩に「魚子は朝夕紀行の筆をたすけ」とあるように、以哉坊の執筆活動を手助けしていたようである。一方里正は、「里子は馬かり宿とりの働き」とあることから、俳諧の能力を買われてというよりは、資金的な援助、行脚におけるホスト的役割を期待されての同行であったと言える。里正は『桜のゆるし』の旅でも、百茶坊に同行し

ていた。また、里正が『鴻嶺下（高嶺下）』に句を載せているだけでなく、矢田の春帖にも壺外・素文の句があることから、近隣の連中間の交流がなされていたことがうかがえる。このような交流が、相乗的な俳壇の発展を促したのである。

山口俳壇の中心は菓種商の壺外、商家の素文でありながら、その周辺では商家だけではなく、武家や豪農、僧など、多様な階層の人々が俳壇を担っていた。同職種に留まらない階層の厚みが、山口俳壇の豊かさに繋がったと言えよう。なお、文政三年から四年にかけて美濃派遣続九世友左坊が西国行脚した際の『老の旅』では、壺外は既に故人となっており、壺外の後継者と思われる壺仙や、里正の子息である里声の名も見られ、次の世代への移り変わっていく様を伺うことができる^{注三〇}。

五 おわりに

地方における俳諧は、中央、地方、どちらか一方のみの働きかけでは成立しない。地方へ勢力を伸ばそうとする中央の活動と、中央の俳諧を学びたいと願う地方の受け皿が合致した時、その俳諧が定着する。山口俳壇においては、近世後期に伝播した美濃派俳諧、道場門前に栄えていた安部家の熱心な文芸活動と、宮竹壺外の存在が重なり合い、確立・発展を遂げた。壺外と素文が築いた山口俳壇は、一定の階層に限定されない連中の面々により構成された、非常に豊かなものであった。

ここで安部家の文芸活動を考えたときに、果たして文芸そのものが独立して発展し得たであろうか、という疑問が生じる。俊英（素

文)の二代前の当主、宗英に関する連歌資料が安部家文書に残って

いることは前述したが、その中には幕府お抱えの連歌師であった里村家の名がある資料もある。それは元禄三年七月二十七日に宗英が里村昌陸・昌億・昌純らを自邸に招いて興行した連歌会の懐紙「賦唐何連歌」^{〔註三二〕}で、安部家が当時の一流連歌師と交流を持っていたことを示すものである。山口の豪富とは言え、地方の一商家でありながら、連歌・俳諧、どちらの分野においても中央の文化人との交流を可能としたのは、文芸とは別に中央との繋がりを持っていたためではないだろうか。一番高い可能性として考えられるのは、商売を通じた関係である。安部家は、十八世紀前半に木綿取引を経営の柱として急速に成長したという^{〔註三三〕}。この木綿取引は、加工した木綿を大坂木綿問屋に卸すもので、大坂市場での地位を占める成功を取めた。安部家の発展は、中央市場との結びつきによるものであったと言えよう。十八世紀前半は、安部家の文芸活動で言えば、連歌を好んでいた宗英の時代から、次の宗樹、俳諧に熱心であった俊英(素文)へと世代が移り変わった頃であろうか。この商売の中で、有力な俳人を通じて一流文化人との繋がりを持つことができたのかもしれない。またその逆に、文芸活動によって手に入れた人脈から、商売の拡充を図ることも可能であっただろう。安部家の文芸がいかなる形で成り立っていたのかを明らかにし、近世において安部家が果たした文芸的役割をさらに解明することが次なる課題である。壺外については、前述の通り、葉種商と俳諧活動の関連性を考える余地があり、安部家の例と共に、俳諧のコミュニティに対するアプローチが今後の課題である。何れにしろ、中央から遠く離れた山口の地で豊かな活動を行っていた安部家の文芸は、これまで以上

に注目されてよいだろう。

(注一) 周防・長門への入集数は、下垣内和人『近世中国俳壇史—研究と資料—』(和泉書院、平成三年六月)による。

(注二) ここでの山口は、近世の山口町(江戸期〜明治二十二年の町名。吉敷郡のうち。萩藩領)を指す。

(注三) 『藤の首途』は、俳諧紀行。半紙判三冊。蘆元坊編。享保十六年、京都橘屋治兵衛刊。富山県連句協会『美濃派・短歌行 俳諧紀行』『桃の首途』『藤の首途』(桂書房、平成十一年十月)の翻刻を参照した。

(注四) 富山県連句協会『美濃派・短歌行 俳諧紀行』『桃の首途』『藤の首途』による。

(注五) 『花供養』は、蘆元坊編の俳諧追善集。半紙本九冊。京都橘屋治兵衛刊。寛保三年三月跋。

(注六) (注一) 前掲書所収。

(注七) ここでの吉田は、近世の吉田村、萩藩領吉敷郡のうちを指す。

(注八) 『梅日記』は、俳諧撰集。半紙本一冊。沾耳(洗耳)編。延享二年九月、京都橘屋藤八刊。柿衛文庫所蔵本を参照した。

(注九) 鹿島美千代「橘屋治兵衛の出版目録について」付『俳諧書籍目録』(東京大学総合図書館酒竹文庫蔵)翻刻の翻刻を参照した。

(注一〇) 宝暦・明和年間に橘屋治兵衛によって出版された、周防・

長門住作者編の俳書を以下に示す（本文で取り上げた『蟬のわかれ』は除く）。

『うしろ紐』（防州、礎洞編、明和年間刊）

『ひと時雨』（長州、露斗編、宝暦年間刊）

（注一一）『鳳巾の晴』は、俳諧紀行撰集。半紙本十冊。以哉坊編。

京都橋屋治兵衛刊。安永三年二月、五竹坊序。卷之一～四は岐阜県立図書館本、卷之五～六は天理図書館綿屋文庫本、卷之七～十は国立国会図書館本を参照した。

（注一二）『美濃』（安部家一一九六）。

（注一三）『桜のゆるし』は、俳諧撰集。半紙本五冊。百花坊巒古編。天明二年三月、傘狂序。岐阜県立図書館本を参照した。

（注一四）以下、本文の翻刻引用に関しては、私に適宜濁点を施し、句読点を補った。

（注一五）『首途』は、上野さち子編『田上菊舎全集』（和泉書院、平成十二年十月）によった。

（注一六）安部家文書の連歌懐紙については、尾崎千佳「安部家連歌懐紙集成」（『やまぐち学の構築』創刊号、平成十七年三月）・

「安部家連歌懐紙集成（承前）」（『やまぐち学の構築』第二号、平成十八年三月）を参照した。

（注一七）『温泉元之遊』（安部家一一〇四）。

（注一八）前述の通り、壺仙とは壺外の誤りと考える。文政期の『老の旅』において山口に壺仙という俳人が存在していたことはわかるため、壺外の子息が壺仙ではないかと考えられる。

（注一九）ここでの矢田は、近世の矢田村（江戸期～明治二十二年の村名。吉敷郡のうち。屋田村とも書く。萩藩領）を指す。

（注二〇）「天明三癸卯周防矢田邑」（安部家一一三二）。

（注二一）『山口県史史料編近世5』（山口県、平成二十二年三月）に翻刻所収。

（注二二）尾崎千佳「安部家連歌懐紙集成」参照。

（注二三）安部家の木綿取引に関しては、平成二十三年八月二十七日に森下徹講師によって行われた「山口市史「史料編」編さん講演会9 山口の近世」の講演内容及び、配布資料を参考にした。また、「山口市史 編さんだより」No.18（二〇一二年二月十五日発行）に「市史編さんトビックス」として同講演会の報告が掲載されている。

〔付記〕本稿は、第三十七回山口大学人文学部国語国文学会（平成二十四年五月十三日、於山口大学人文学部）における同題の口頭発表に基づいたものである。席上ご教示戴きました先生方に深謝申し上げます。

（はらだ・ゆい）

[表二] 山口連中春帖目録

No.	整理番号	年記	標題	書型	刊記	内容	巻頭	巻軸
1	安部家1155	明和六年巳	鴻嶺下	横本 (含共紙表紙三丁)	花洛橋冶寿粹	歳旦・春興・歳暮・ 下略	壺外	壺外
2	安部家1156	明和七年寅	鴻嶺下	横本 (含共紙表紙四丁)	書林花洛寺町 二條橋冶板	祝晨・歳旦・年尾	壺外	壺外
3	安部家1159	明和八年卯	鴻嶺下	横本 (含共紙表紙五丁)	花洛寺町橋冶 寿粹	歳旦・聖節・祝晨・ 歳暮・年尾	壺外	壺外
4	安部家1160	明和九年	鴻嶺下	横本 (含共紙表紙四丁)	花洛寺町たち はなや板	元旦・聖節・歳暮・ 納会	壺外	壺外
5	安部家1164	安永二年巳	鴻嶺下	横本 (含共紙表紙五丁)	花洛橋冶寿粹	祝晨・聖節・歳暮	壺外	壺外
6	安部家1176	安永三年午	鴻嶺下	横本 (含共紙表紙四丁)	花洛橋冶寿粹	祝晨・聖節・歳旦・ 歳暮・年笔・各詠	壺外	壺外
7	安部家1190	安永四年未	鴻嶺下	横本 (含共紙表紙四丁)	花洛寺町橋屋 板	歳旦・聖節・納会	壺外	以哉坊
8	安部家1194	安永五年丙申	周防	横本 (含共紙表紙四丁)	花洛寺橋冶寿 粹	歳旦・聖節・納会	壺外	壺外
9	安部家1199	安永六年丁酉	鴻嶺下	横本 (含共紙表紙四丁)	花洛橋冶寿粹	歳旦・聖節・納会	壺外	壺外
10	安部家1125	安永七戊戌	周防山口高嶺下	一枚刷堅紙	京橋冶刀	歳旦・人日酉の歳 暮・文通	壺外	壺外
11	安部家1126	安永八年巳亥	周防山口高嶺下	一枚刷折紙	花洛橋冶寿粹	歳旦・聖節・春興・ 戌の納会・文通	壺外	壺外
12	安部家1210	安永九年庚子	鴻嶺下	横本 (含共紙表紙五丁)	京橋冶寿粹	歳旦・聖節・納会・ 守歳	壺外	壺外
13	安部家1214	安永十年巳	鴻嶺下	横本 (含共紙表紙四丁)	花洛橋冶寿粹	鶏旦・祝晨・子の 歳暮・納会・年抄	壺外	壺外
14	安部家1227	天明八年戊申	高嶺下	横本 (含共紙表紙五丁)	花洛橋冶寿粹	歳旦・春興・年庵・ 守歳	壺外	壺外
15	安部家1229	天明九年巳酉	高嶺下	横本 (含共紙表紙四丁)	花洛橋冶寿粹	歳旦・聖節・人日・ 春興・文通・歳暮・ 除夜	素文	壺外
16	安部家1233	寛政二年庚戌	高嶺下	横本 (含共紙表紙五丁)	花洛寺町橋冶 寿粹	祝晨・歳祝・春興・ 納会・年内立春	壺外	壺外

[表三] 山口連中春帖入集者

No.	整理番号	年記	標題	入集者
1	安部家1155	明和六年巳	鴻嶺下	壺外・素文・独笑・一葉・大車・如舟・左琴 (吉田連中：可公・楚石・其声・一瓢・萩露・鼠□・鼠礎・□雪)
2	安部家1156	明和七年寅	鴻嶺下	壺外・素文・左琴・独笑・琴露・貫里・梅之・蘭雨・可丁・其流・ 一葉・素明・左丈・如行 (吉田連中：可公・楚石其声・鼠礎・萩露・多□・花雪)
3	安部家1159	明和八年卯	鴻嶺下	壺外・素文・琴露・素明・一葉・儲州・左錦・花放・蘭雨・梨更・ 梅之・如行・其流・左丈・貫里 (吉田連中：可公・楚石・鼠礎・也水・萩露・多□)
4	安部家1160	明和九年	鴻嶺下	壺外・素文・琴露・貫里・左丈・素明・桂兎・□□・之流・梅枝・ 梨更・花放・猶抄・一葉・左錦 (吉田連中：可公・楚石・素礎・也水・萩露・多□・枇路・雨□・)
5	安部家1164	安永二年巳	鴻嶺下	壺外・素文・琴露・桂兎・貫里・左錦・素明・其流・梅之・花放・ □州・一葉・左丈・燕糸・一芳・藤巴 (吉田連中：楚石・素礎・也水・萩露・多□・雨□・桃路・如周)
6	安部家1176	安永三年午	鴻嶺下	壺外・素文・梅之・貫里・素文・素明・左錦・儲州・玉川・燕糸・ 市芳・藤巴・利更・一葉・桂兎・之流・左丈 (吉田連中：可松・楚石・桃路・素礎・也水・如周)
7	安部家1190	安永四年未	鴻嶺下	壺外・素文・梅之・貫里・素明・左錦・儲州・花放・独笑・燕糸・ 市芳・藤巴・利更・桂兎・里正 (吉田連中：可松・楚石・桃路・楚礎・也水・如風・遊之)
8	安部家1194	安永五年丙申	周防	壺外・素文・梅之・貫里・左錦・儲州・花放・可朝・燕糸・市芳・ 藤巴・利更・里正 (吉田連中：可松・楚石・桃路・也水・如風・母竹)
9	安部家1199	安永六年丁酉	鴻嶺下	壺外・素文・貫里・利更・藤巴・枝芳・母竹・儲州・可朝・花放・ 左錦・里正
10	安部家1125	安永七戊戌	周防山口高嶺下	壺外・素文・貫里・左錦・里正・(美濃文通：以哉坊)
11	安部家1126	安永八年巳亥	周防山口高嶺下	壺外・素文・貫里・桃巴・左錦・李悠・里正・(美濃文通：以哉坊)
12	安部家1210	安永九年庚子	鴻嶺下	壺外・素文・貫里・許飲・花放・桃巴・独笑・巒台・其由・可朝・ 左錦・儲州・梨更・駟徑・梅之 (長吉田連中：楚石・桂風・寸松・里松・一瓢・千風・一水・素露・ 鼠友・李江)
13	安部家1214	安永十年巳	鴻嶺下	壺外・素文・貫里・可朝・桃巴・其由・左錦・駟徑・梨更・花放 (長南吉田連中：楚石・一水・楚口・桂草・一瓢・素露・鼠友・道尔 寸松・里松・千風)
14	安部家1227	天明八年戊申	高嶺下	壺外・素文・桃巴・其宥・緩固・瓠風・素遊・曉□・蟠路・蘭葩・ 梨更・貫里 (秋穂連中：湖月・琴糸・兎雪・不及・竹葉・柳水・虎石・左丈・東□)
15	安部家1229	天明九年巳酉	高嶺下	壺外・素文・無荷・度江・其礎・如霧・壺猷・冲羽・素風・貫里・右琴・ 東水・志逸・梨更・辦二・瓠風・千里・緩固・里蝶・蟠路・蘭葩・ 花蜜・素遊・桃巴 (文通：其日坊・東□・孤鱗・鸚仙・不尤・五葉)
16	安部家1233	寛政二年庚戌	高嶺下	壺外・素文・胡雪・芦舟・梨更・冲羽・無荷・度江・如霧・壺固・ 花客・蘭葩・子与・和遊・何笑・實路・票瓜・壺脯・素風・其宥・ 松巴・其日坊・(在東武連中：貫里・右琴・里蝶・其礎)